

御所市 中西遺跡 第31次調査



2019年11月23日

奈良県立橿原考古学研究所





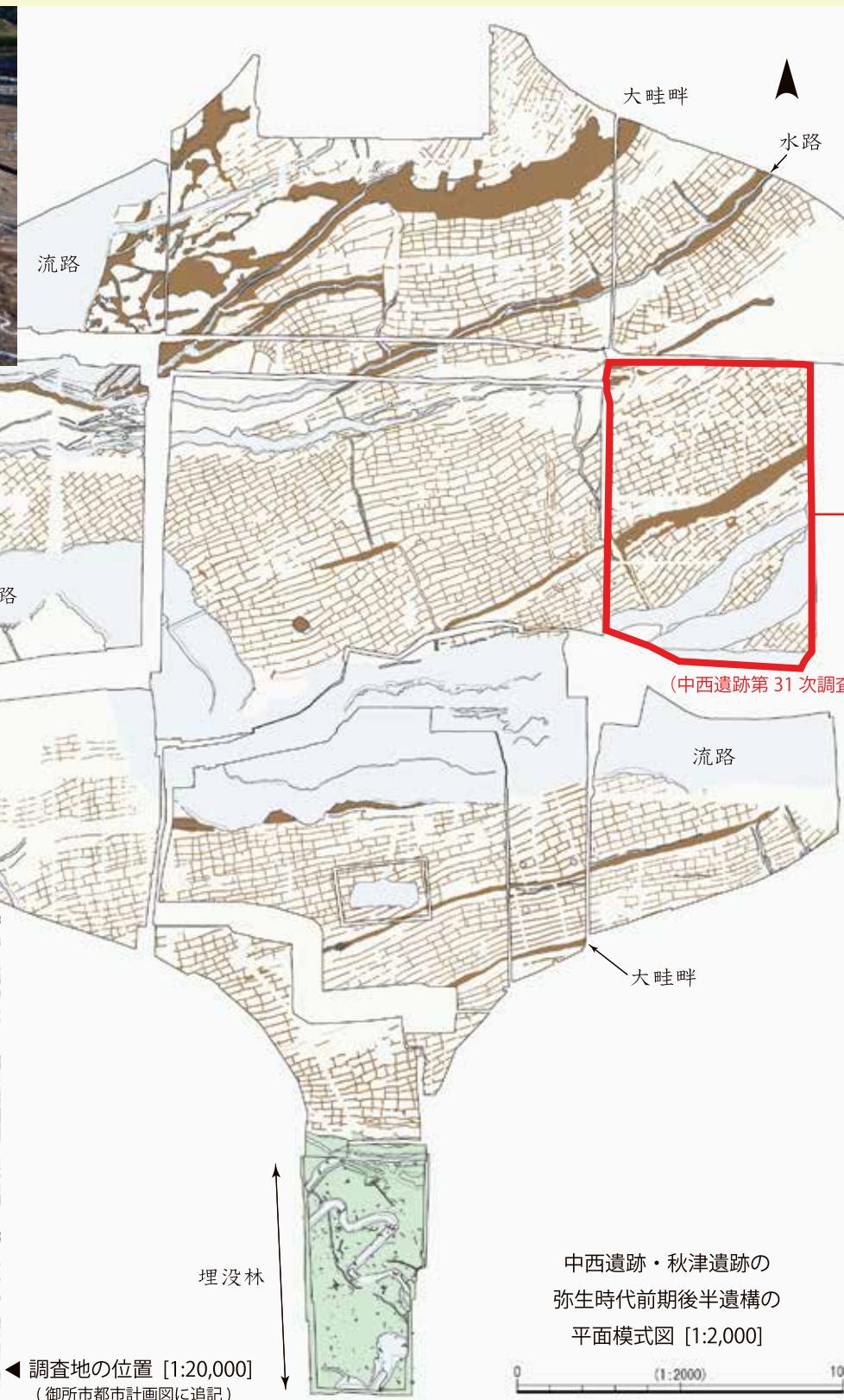
水田面の調査風景です。田面には無数の弥生時代の人々の足跡が見つかりました。歩いたような規則性あるものは稀で、田面全体にあらゆる向きのものが認められます。足跡が残された頃には、田の土は湿っており、何らかの作業がおこなわれていたのでしょうか。この水田が洪水によって埋もれた季節を示唆するかもしれません。



▲ 調査区西南部にある水路を北西から見たところです。水路の西岸（写真右）の標高が高く、東岸（左）が低い、傾斜の変わり目に設けられています。高所からの排水と低所への給水機能をもつと考えられます。



▲ 地形の傾斜に沿って幹線小畦畔（タテあぜ）が直線的に並置され、それに直交して支線小畦畔（ヨコあぜ）を設け、傾斜面を階段状に区切る小さな水田区画が形成されています。写真は南西（写真右）から北東（左）に向かう傾斜面に配された水田区画を、横（北西）から見たものです。



▲ 調査地の位置 [1:20,000]
(御所市都市計画図に追記)

中西遺跡・秋津遺跡の
弥生時代前期後半遺構の
平面模式図 [1:2,000]



大畦畔

水路
↓

流路 3002

流路 2001

4m

〇はじめに

本調査は、御所市條、室、池之内に位置する中西遺跡の第31次調査です。檍原考古学研究所では、2009年度より、京奈和自動車道御所区間建設にともなう中西遺跡と、北接する秋津遺跡の調査をおこない、御所南I.C.予定地の約9割の調査を終えました。これまでの調査では、弥生時代前期の埋没林や水田、古墳時代前期の方形区画施設、独立棟持柱を有する掘立柱建物や竪穴建物群などを検出しました。今回の調査では、弥生時代前期の水田が事業対象地の東端まで広がり、さらに対象地外へも繞くことが明らかになりました。

〇〇 調査成果

本調査では、大きく4つの遺構面を確認しました。第1遺構面では弥生時代後期から古墳時代中期の溝、古代の溝、中世以降の井戸と素掘り小溝を、第2遺構面では弥生時代中期前半の水田、溝、流路を、第3遺構面では弥生時代前期後半の水田、水路、流路を、そして、第4遺構面では弥生時代前期前半の水田と縄文時代晚期の包含層を確認しました。説明会では第3遺構面を紹介します。

第3遺構面では、帯状の高まりである畦畔に囲まれた弥生時代前期の水田を410区画検出しました。水田の総面積は約3,500m²で、個別の水田区画は面積約9m²と小さく、“小区画水田”と呼ばれるものです。各水田は長辺2.0～5.6m、短辺1.4～3.3mの長方形をしています。周囲を巡る畦畔は低く、田面との比高は2～3cm程度のため、湛水深もまた小さかったと考えられます。田面の多くは凹凸が顕著で、中には様々な方向を向く数多くの足跡が認められるものもあります。田面を囲む畦畔には大小の2つの大きさがあります。多くは幅0.3m前後の小畦畔です。小畦畔は、南西－北東方向に2～3m間隔で平行して並ぶ幹線小畦畔（タテあぜ）と、それに直交して連結する支線小畦畔（ヨコあぜ）からなり、全体で“あみだくじ”的な形を呈しています。小畦畔に対する大畦畔は、幅1m以上

上、田面との比高も5cm以上あり、人が十分歩けるほどの規模があります。今回の調査区では中央に1条あり、幹線小畦畔と同じ南西－北東の方位をとります。大畦畔は水田群中の尾根状の高まりに設けられており、複数の小区画水田を大きなまとまりに分けています。調査区の西南部には、この大畦畔に直交する水路があります。水路は等高線に沿って設けられ、その西岸が一段高くなっています。水路の両岸はそれに接する水田の畦畔も兼ねていることから、標高の高い西側の水田からの排水と、低い東側の水田への給水機能を担っていました。調査区南部には、南西－北東方位をとる氾濫流路が2条あります。流路2001は第2遺構面にともなう弥生時代中期のもので、流路3002が第3遺構面にともなう弥生時代前期末のものです。流路3002は、両岸の水田を侵食しながら幅を広げ、最終的には、運搬された土砂で周辺の水田を埋め尽しました。洪水によってたらされた土砂は厚さ20～30cmにも及びます。第2遺構面の弥生時代中期前半の水田は、この上に設けられました。洪水の何年後かは明らかではありませんが、弥生時代の人々が再びこの地に戻り、水田の復興を図ったことがわかります。

〇〇 まとめ

今回の調査の成果により、中西遺跡・秋津遺跡の調査で検出した弥生時代前期の水田の面積は、延べ約43,000m²になりました。弥生時代前期の水田としては、日本国内でもっとも広くまとめて確認した事例です。調査地周辺の地形を勘案すると、中西遺跡・秋津遺跡の水田の広がりは100,000m²を超える可能性があります。弥生時代前期の2,500～2,400年前の稻作が伝わって間もない頃、奈良盆地の西南部では灌漑施設を完備した水田が広大に敷設され、稻作が営まれていたことが明らかとなりました。洪水によってこの広大な水田が土砂に埋もれることがあっても、弥生時代の人々は、適地を見極めながら少しづつ水田を復興したことを、この中西遺跡・秋津遺跡に見ることができます。

御所市 中西遺跡 第31次調査 現地説明会資料

2019年11月23日 奈良県立檍原考古学研究所

〒634-0065 奈良県檍原市畠傍町1番地

Tel: 0744-24-1101 URL: <http://www.kashikoken.jp/>
(過去の現地説明会資料は、こちらからご覧いただけます) → → →



奈良県立檍原考古学研究所
マスコットキャラクター
イワミン